



ゆめ通信

2019.5.1 No.104

発行 日本養豚事業協同組合

〒104-0033 東京都中央区新川2-1-10
八重洲早川第2ビル6階

TEL.03-6262-8990 FAX.03-6262-8991

第18回通常総会開催

専務理事 矢嶋 隆次

平成最後の年の31年2月22日に学士会館（東京都）にて、第18回通常総会を開催しました。岐阜県と愛知県で豚コレラが発生し、組合員の中でも多くの種豚がいる愛知県野田の養豚団地に豚コレラが発生し大騒ぎになっているときの開催でした。

総会は、組合員総数431名、定足数216名、出席者総数256名（本人出席37名、委任状出席98名、書面出席121名）でしたので、司会を務めた浅野政輝理事が総会の成立を宣言して議事の審議に入りました。中国ではアフリカ豚コレラ、岐阜・愛知で豚コレラが流行している中での開催となりましたので、参加者が少ないのではないかと心配しました。事前に開催確認の電話連絡がかなり多く入り、皆様にお気遣いいただいていることが痛切に感じられ、ありがたい思いをいたしました。流石に組合員の参加は少し減りましたが、おかげさまで、全体としてはほぼ例年通りの参加人数となりました。

冒頭の理事長の挨拶でも豚コレラに対する危機感が表明されました。中国で流行しているアフリカ豚コレラに対しての国境防疫に関する国の責任は重いものであり、我々養豚農家にはどうすることもできないこと、国内の豚コレラに対しても国を始めとした行政の対応で早期に収束させてもらいたいとの意見表示がありました。その後組合の決算内容についての概略の説明がなされ、組合員の協力により順調な決算とすることができたことに感謝の気持ちを表明した後、審議に入りました。

東日本大震災の前年をピークに、ゆめシリーズの販売量は低下を辿ってきましたが、クランブル飼料やその他の配合飼料は順調に販売量を伸ばし、直接取引と間接取引を合わせた飼料の合計販売数量は132

千トン（108%）となりました。

その他の商品では、東海ブリーディングの第2農場が稼働したことによりTopigs種豚が2,645頭（179%）と大幅に販売頭数を伸ばしたこと、マミーAやマミーBなどの混合飼料が118%、メンデルジャパンの精液が13万ドーズ（113%）、人工授精用カテーテルが深部注入用を中心に85万本（111%）と大幅な伸びをしております。精液はメンデルの優秀な遺伝子が評価されたものと、またカテーテルは価格と同時に衛生的な製造工程（中国では人間用の輸液セットを製造している工場で製造し、出荷時にはエチレングス滅菌を義務付けている）や倉庫の衛生管理（国内では倉庫からの出荷時に消毒液を噴霧し乾燥した後に出荷）を徹底していることが評価されているものと思います。

上記の結果、5期連続で3,000万円の利用分量配当ができることとなり、総会で承認を得られました。できるだけ早く配当を実施したいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

総会後の記念講演会ではお三方に講演をお願いしました。最初は三菱商事の元橋様から同商事が米国に持っている豚肉処理会社のインディアナパッカーズの現状と将来の戦略についてお話しいただきました。お二人目は、国内で発症している豚コレラの感染ルートに野生のイノシシが疑われていることから、イノシシの生態研究の第一人者である長崎県（現在は農研機構に転籍）の平田様から疾病の感染防御を念頭に置いた生態研究結果の発表をお願いしました。

三人目は農林水産省の菊池様より最も注目されている中国のアフリカ豚コレラとともに国内の豚コレラについての現況をお話しいただきました。

＜第18回通常総会・記念講演＞

米国養豚産業の現状 ～ Indiana Packers社事例を中心に～

三菱商事(株)生活産業グループ生鮮品本部 畜産部
元橋 航平



2017年4月から2018年3月まで、三菱商事が80%、伊藤ハムが20%の株を保有し、生産から処理・加工、飼料製造まで行っている米国企業のAmerican Indiana Packersに在籍していた。社員数2000名。販売先の約80%は米国内、20%はメキシコや日本である。出荷頭数は90万頭。1日当たりの処理頭数は17500頭。現在は約9割が2サイト方式で、一部3サイト方式が残っている。今後は全て2サイトに変更予定。

提携先の繁殖農場6戸から子豚を購入し、預託先（契約農家は約100戸）で肥育しているが、契約農場での肥育頭数は処理頭数の20%で、80%は独立した農家より都度買い付け交渉をしている。

肥育農家は一日に2回、1回2時間、農場内を視察すれば良いという契約で、その内容は給水・給餌器が壊れていないか、部屋の換気がおかしくないか程度のことを確認するもの。指導員は7名で、担当の契約肥育農場を最低1週間に1回巡回し、一緒に状態確認をし、疾病を見つけたらその場で必要な薬を確認したり、疾病がわからなければ組織片を持ち帰り、研究機関などと連携し病気を特定して必要な手当を行っている。8000頭規模の肥育農場は2名で運営しており、約170日で出荷。種豚は生産効率を最重要視し繁殖能力/産肉量に優れるものを選択し、飼料は生産性を最重要視し、肥育期間を細分化している。市場からの要求はアニマルウェルフェアの配慮

や医薬品使用量削減で、種豚、飼料、飼い方に於ける差別化は求められていない。

米国と日本の生産コストを比較してみると（為替レート約110円）、枝肉歩留まり65%ベースで、キロ当たりのコストは米国が約180円、日本が約440円。飼料コストは、米国は1キロ当たり約83円で、日本は276円。日本は極力手間をかけない営農方法を目指して、出来る限り費用や薬品代を削減することが大事だと思う。

全米で5%の事業体が、全米で68%の豚を保有している。農場の規模が5000頭以上の1事業体当たりの平均頭数は15000頭。豚の生体重は1986年から30年で116%増加している。処理事業では、大きい豚を処理した方が1頭から得られる利益が多くなるため好まれる。

穀物の生産性も右肩上がりでも向上している。病害虫や乾燥に強い種子の改良が進んでおり、ドローンや大規模な機会を投入し、なるべく人手がかからないような方法が確立されている。

国内の事業環境においては、後継者・労働者不足、環境問題、規制強化・近隣住民反対、TPP問題などもあり今後は輸入機会増加、国内人口減少などの問題があるが、これらを変革を起こす好機であると捉えて、国内外の最新情報を取り入れていきたいと思っている。（東野）

イノシシの生態と防疫

長崎県農林技術開発センター 研究企画室
平田 滋樹



畜産業を守るバイオセキュリティと、野生動物と家畜が罹る病気や人畜共通感染症などの防除・防疫は、労力負担や効果が大きく異なるため分けて考える必要がある。豚コレラウイルスが野生のイノシシに存在するということは国として防ぐ必要があるが、対策を講じるのは非常に困難を要するので、生産者と行政等が今やるべきことを分けて考えることが重要である。

どれくらいウイルスや病気がイノシシの中に入ってきているか、それによりイノシシにどのような影響があるのか等を調べる必要がある。猟友会や狩猟者に任せた捕獲では、イノシシを追い払い余所に行かせてしまったり、捕まえたイノシシの血や泥が付いたトラックで走り回ることにより、逆に感染を広げてしまう可能性もあるため、捕獲時の法律体制の整備も必要である。周辺に影響の少ない方法でイノシシ

シの数を減らすことと、場合にはよっては柵や経口ワクチンの投与による防疫が必要である。

現在イノシシは南極大陸を除いて全世界に分布が拡大している。野外イノシシの平均産子数は4～5頭で、通常長生きしたもので5～6歳、平均年齢は1歳前後で、多産多死である。野外で豚コレラのウイルスがイノシシに入っても、10年くらい集中的に防除防疫を繰り返せばイノシシの世代交代が早めに終わる。

イノシシ被害対策の基本は、柵を作る防護対策、イノシシが好む場所を減らしたり誘引する場所を無くす棲み分け対策などをしながら捕獲をするという総合的な対策が必要である。通常効果があるといわれているのは電気柵、金網柵、ワイヤーメッシュ柵である。電気柵は非常に効果が高い。痛みには慣れないが、光、音、臭いには慣れてしまい、慣れが生じると逆に来るようになる。イノシシはくさい臭いも割と好む。

電気柵は感電をさせないと意味がない。イノシシに電気が流れやすいポイントは鼻、腹、脚の3箇所しかない。電線に電気を流し、イノシシの鼻先から脚の裏に電気を流し、アースで拾い上げて1つの回路を作る必要がある。電線の高さは20センチ間隔で、二段か三段張りにする。脚が付くところは舗装路な

どの電気の通りにくいところを避ける。アースは地中30センチよりも低いところに、少なくとも先端が刺さるように湿っている場所を中心に選ぶようにする。畜舎の支柱が金属であれば、それをアースにすることも出来る。電圧を計りながら管理すること。

ワイヤーメッシュとか溶接金網も一般的になっているが、本気を出したイノシシは壊すことが出来る。通常イノシシは一番下の地面との隙間から入る可能性が高いので、隙間を防ぐことが大事である。よく通るところは限定されている。豚舎の近くで柵を作って、そこで捕獲するというのはリスクが高いが、豚舎の柵が壊される場合には、恐らくそこで捕獲する必要がある。柵を作って、豚舎から200～600メートル程離れたところで捕獲するというのが理想的である。柵を設置した場合に、下から潜り込まれるというのが分かっている場合には、コンクリートで覆ってしまうのが確実である。

残渣を置いておくなどの、無意識の誘引には気を付けること。捕獲はイノシシと家畜を交錯させる可能性があるので、距離をとった方が良い。

家畜化が進んでいるためにイノシシ対策は畜舎の技術を逆に転用せざるを得ない部分が非常に多い。

(東野)

中国のアフリカ豚コレラと我が国で発生した豚コレラについて

農林水産省消費・安全局動物衛生課
課長補佐 菊池 栄作



農林水産省からは消費・安全局動物衛生課の菊池様より中国のアフリカ豚コレラと国内で発生した豚コレラについて説明を受けました。

アフリカ豚コレラウイルスはアスファウイルス科に属するウイルスで国内の豚コレラはフラビウイルス科に属しているとのこと。たとえば犬と猫くらい違うウイルスということになります。しかしイノシシ科イノシシ属（豚とイノシシ）にしかかからないとか、感染した時の症状の出方などもよく似ていて、説明を受けた限りはどちらも厄介なウイルスです。

アフリカ豚コレラは国境での防疫措置を確実にしてもらい、国内に絶対持ち込まれないよう、国に責任をもって対応してもらわなければなりません。検疫探知犬の説明がありましたが、見つけた違反者には法律で決められている罰則を厳重に適用し『違法食肉を日本に持ち込むと大変なことになる』ことを

すべての観光客に周知してもらうようにしなければなりません。

一方、国内で発生している豚コレラの感染ルートではイノシシが疑われています。これは、人間が放置した食物をイノシシが食べ、感染し、豚に伝播してしまったのだらうと推察されています。いずれにせよ野生動物が感染ルートになると厄介なことになります。柵や網などで侵入を防ぐだけでなく、豚舎の周囲に野生動物を引き付ける原因となる『食べ物』を置かない、衛生管理を徹底的に行うなど、野生動物を引き付けない対策が必要になります。

豚事協が推進してきた“5S”の重要性が改めてクローズアップされてきます。鳥獣害への対応は地域との連携が重要になります。今年の豚事協のセミナーではイノシシ対策の提案などをしていきますので、是非多くの組合員の参加をお願いします。（矢嶋）

第19期支部セミナー概要決定

18期セミナーは17期に続き、開催の前の1時間を利用し、組合員と理事長とのコミュニケーションの場を設けてじっくりと組合活動の問題点・改善点を意見交換する時間が取れ、豚事協取扱商品の取扱拡大におおいに寄与しました。

繁殖成績に重きを置いた講演では、(有)メンデルジャパンにより「人工授精の基礎、分娩率90%以上にに向けて」と題して精液の優位性が講演され、関東支部セミナー以降は「生産現場から見た繁殖成績向上のポイントと対策について」と題して有限会社ロッセ農場河瀬亮輔氏よりTopigsの能力を発揮させる候補豚育成期・人工授精期・妊娠期・分娩期・授乳期・離乳期の繁殖ループを上手く回すための工夫とポイントが分かり易く説明されました。

さらに、生産性の向上として「事例紹介を踏まえた最近の疾病対策と繁殖成績の向上について」と題して(株)バリューファーム・コンサルティング代表取締役呉克昌氏、(株)スワイン・エクステンション&コンサルティング代表取締役大竹聡氏、(有)アークベテリナリーサービス代表取締役武田浩輝氏、(有)サミットベテリナリーサービス獣医師石関紗代子氏の4名の獣医師が、経験やコンサルティングの成績を踏まえて今後の養豚経営の在り方について講演を戴きました。

第19期の事業計画が平成31年1月24日の理事会で承認され、事業計画に基づく支部セミナーの開催要領が下記のとおり決定いたしました。

昨年に続き支部セミナー開催前に豚事協の事業拡大に向けた、理事長(副理事長)・組合員の意見交換会を設定し、啓蒙を図ることとしています。

今期の支部セミナーは、中国、ベトナムで猛威を振っているアフリカ豚コレラ及び我が国の養豚業界の脅威となっております豚コレラの蔓延防止を踏まえた衛生対策の具体例とその方策をセミナーのテーマとすることとなりました。

イノシシに造詣が深く、野生動物の生態から迫る効果的な獣害対策の実績をあげ全国を飛び回ってい

る農業・食品産業技術総合研究機構 西日本農業研究センター 鳥獣害対策技術グループ長であり麻布大学大学院客員教授でもある江口祐輔氏、自然生態系の保全や野生動物と人の軋轢解消を目指す野生動物管理学に取り組む宇都宮大学 雑草と里山の科学教育研究センター准教授の小寺祐二氏、獣害対策(イノシシ)、普及啓発と人材育成を専門分野とされる長崎県農林技術開発センター研究企画室(兼)農山村対策室主任研究員である平田滋樹氏を招き「イノシシの生態と疾病防御について」のご講演を戴きます。

そして、(株)バリューファーム・コンサルティング代表取締役呉克昌氏、(有)サミットベテリナリーサービス代表取締役石川弘道氏、(株)スワイン・エクステンション&コンサルティング代表取締役大竹聡氏、(有)アークベテリナリーサービス代表取締役武田浩輝氏より「システム養豚への移行による疾病対策～その留意点及び方策について～」のご講演を戴き、「PRRSフリーへの経緯と対策について」と題して組合員である(株)ロッセ農場代表取締役社長栗木貢男氏、(有)マルミファーム代表取締役社長稲吉克仁氏、(有)コマクサファーム代表取締役社長遠藤勝哉氏、(有)松村牧場松村淳氏にご講演いただきます。

それぞれの支部の講演が特色のあるものとなり大いに期待されることと思われます。

所属の支部だけでなく、他支部のセミナーへの参加で幅広い情報を入手することが出来、経営のお役に立つことが期待できるセミナーとなりますことから、他支部へのより多くの組合員のご参加をお待ちしております。

(山田)

開催予定月日	開催支部	開催場所
6月14日(金)	中部支部	名古屋市
7月5日(金)	関東支部	東京都
7月26日(金)	北海道支部	札幌市
8月30日(金)	東北支部	仙台市
9月13日(金)	中四国支部	松山市
10月11日(金)	九州支部	熊本市
11月15日(金)	沖縄支部	那覇市

豚事協若手経営者育成塾第2期第6講座開催

平成31年3月12日（火）AP浜松町Cルームに於いて、最近の養豚情勢に伴う問題提起とその対応についての塾長挨拶を受け第2期豚事協若手経営者育成塾第6講座が始まりました。

最初に有限会社コマクサファーム代表取締役社長遠藤勝哉氏より「ビジネスモデル事例～負の遺産を背負って経営継承、分離生産で生産性改善、規模拡大のビジネスモデル～」と題しての講義がなされました。

2007年当時は母豚1頭当たりの出荷頭数は16.6頭であったが、3サイト、2肥育、APPフリー化を経て10年後の2017年には27.6頭の出荷がなされたことが披露され、苦しい時代からのキャッシュフローや事業承継の難しさも示され、氏の迫力ある説明が塾生の心に火をつけた様子で、質問も組織・事業承継・規模拡大・運転手確保問題など多岐に亘ってなされました。

続いて、モラー社 代表取締役社長ウルリヒ・ハイトラゲ氏より「ドイツの臭気対策、背景と実践」と題された講義では、まず、ドイツの位置づけが披露され、大規模養豚（肥育豚2,000頭超、離乳子豚6,000頭超、母豚750頭超）の糞尿の排出規制が法制化されたことが説明されました。

ウッドチップ・木の根を使用するバイオフィルターシステム、酸を含む水による処理を行う化学的排気洗浄システム、有機酸未使用の水による処理を行う生物学的排気洗浄システム、化学洗浄とバイオフィルターの複合型排気洗浄システム、排気パイプ内に組み込まれた科学的洗浄を行う特別なシステムの問題点と評価が示されたのち、モラー社が推奨する生物学的排気洗浄機の詳細が説明され、わが国での設置例が紹介されました。

さらに、「豚舎脱臭装置導入1年の結果」と題して、日本養豚事業協同組合松村昌雄理事長より講義がなされました。

脱臭装置導入の背景、効果、問題点が説明され、調査事例として脱臭技術と分析された各臭気数値か

らその効果が示されました。

最新の豚舎設計・設備～AWや脱臭への配慮、IoT可能性～と題してヨシモトアグリ株式会社エンジニアリング部の服部武尊氏より、最近の豚舎動向が説明され、ウィンドレス豚舎・開放豚舎の工法・利点が述べられ、特にウィンドレス豚舎のパネル工法と換気・脱臭システムが詳しく紹介されました。

さらに、360頭・800頭・1,200頭一貫農場のモデル豚舎がIoT（Internet of Things）を活用した母豚の個別給餌システム「ニュートリサウ」、肥育豚の増体管理「アイグロウ」、肥育豚の出荷予測と選別「ソーター」を備えた飼養管理システムが紹介されました。

翌平成31年3月13日（水）は、株式会社マックブラニング代表取締役熊谷隆氏より「事業計画の組み立て考察～事業計画を作成するポイント、資金繰り・返済計画～」についてエクセルを駆使しながらその詳細が説明されました。

まず事業の基本方針の策定から始まり、設備の仕様を定めたのちに事業計画の策定を行うことが示され、事業計画の策定では、まず種豚・子豚・肉豚の生産性の基本条件の入力から始まり、仕入・販売・経費条件等を入力する（過去の実績を入力することにより自動的に設定される）ことにより事業計画書・損益計算書・キャッシュフロー計算書ができあがること、エクセルファイル稼働しながら説明されました。

最後に塾生各位より完成されたものもあり、又未完成のものもある経営ビジョンシートの内容が説明され、受講者の質問を受け、竹延哲治理事よりの厳しいながら暖かい指摘を受けての充実した講座となりました。

次回豚事協若手経営者育成塾第7講座は6月11日（火）～6月12日（水）に同一の会議室で開催されます。（山田）

香川雅彦氏・黄綬褒章受章

平成30年秋の叙勲で、組合員の香川雅彦氏（有）香川畜産代表取締役・宮崎県）が黄綬褒章を受章されました。

黄綬褒章とは、農業、商業、工業等の業務に精励し、他の模範となるような技術や事績を有する方に授与されるものです。

大学卒業後1980年に就農した香川氏は、2010年には口蹄疫の被害により全頭殺処分を経験しましたが、自農場のみならず地域の復興に尽力し、自社では高

い生産成績を実現しながら、従業員の働きやすさにも目を向けて経営をされていること、2017年には農林水産祭天皇杯を受賞し、2018年6月にはJPPAの会長に就任されたことなど、業界への貢献が評価され、今回の受章となりました。

おめでとうございます。

（東野） 香川雅彦・洋子ご夫妻



（有）マルミファーム・日本農業賞大賞受賞

第48回日本農業賞に於いて、（有）マルミファーム代表取締役稲吉克仁氏、取締役稲吉幹子氏（愛知県）が個別経営の部の大賞を受賞されました。

日本農業賞は、日本農業の確立を目指して、意欲的に経営や技術の改善に取り組み、地域社会の発展にも貢献している個別経営と集団組織や、食や農の担い手として先進的な取組みをしている個人・集団組織を表彰するもので、基準のいずれかに該当し、かつ経営主の配偶者の貢献度が高いと認められる場合には夫婦連名で表彰されます。また、それぞれの部門での大賞受賞者には、農林水産祭天皇杯の選考対象の資格となる栄えある農林水産大臣賞が合わせて贈られます。

（有）マルミファームは、技術革新を通じ、国際競争力を持つ高い生産性を安定的に実現していること、中規模養豚経営ながら協同の力を活用し飼料の低コスト購入・ブランド化販売による高収益経営を実現し、経営継承も優れていること、「3つのゆとり」を経営理念に、優れた労務管理・人材育成を実現していること、多様な地域貢献をしていること、また幹子氏は娘さんの詩を元にした絵本を紹介するなど養豚への理解を深める活動をしていること、などが評価され夫婦連名での受賞となりました。

お二人は「地域の皆様のご理解のお陰であると非常に嬉しく思っています。良い豚・良い餌・良い管理をモットーに、健康な豚を育てるということと、環境問題にも留意し、餌に工夫をしてアクの少ない柔らかくて美味しい豚肉を生産しています」と受賞の喜びを語られました。

今回個別経営の部には91件の応募があり、都道府県の審査、中央審査会委員の現地調査等を経て、農業畜産、品種畜種関係なく選ばれる大賞は3組。そのうちの1組に（有）マルミファームが選ばれたことは、養豚業界にとってもとても誇らしいことだと思います。おめでとうございます。（東野）



豚コレラで殺処分を経験した瓜生さんの心

愛知県の豚コレラの第2例目は、豚事協の組合員が運営する愛知県野田市の養豚団地でした。ここには8農場が隣接して入居しており、二農場で豚コレラの確認がされると、同一地域内のため、全農場が一農場とみなされ8農場全ての農場の豚が殺処分の対象となりました。該当農場の皆さんの無念は如何ほどのものだったか推察にあまりありませんが、その中の一人、瓜生陽一さんがその思いを寄せられましたのでご紹介します。

こんな思いはもう終わりにしたいと思い、組合員全員がその思いを共有するとともに、すべての組合員が衛生管理をしっかりと感染防御に心がけましょうとの思いを込めてご紹介します。これから先は瓜生さんからお寄せいただいた文章（原文のまま）です。（矢嶋）

こんにちは、今回の殺処分については、ウチは陰性判定だったんですが、畜産団地という立地条件で殺処分になりました。仲間の一件目の発生後、他7戸の血液検査をして、陰性が確認されたのが、一日後。しかし、殺処分が決まったのがそこからさらに半日後…この間の長かったこと…。豚コレラのこれ以上の感染を防ぐためにも、殺処分はやむおえない事…それは全員が分かっている！ただ、陰性農場の気持ちは本当にやるせない…。殺処分後に、国のほうから「家畜飼養管理基準？…にそった飼養管理農場か聞き取りがあり、満たしていない部分は減点され

その減点分が保証額の減額になる！…と、聞きました。が、せめて、陰性農場だけは満額支給してもらいたい。そんなことで減額されるのは到底納得できません！さらに辛いのが3キロ圏内の出荷停止農場…これが長引けば、最悪健康に産まれた子豚を犠牲にすることになります。元気にオギャーと生まれたのに、ただ死んでいくだけ…飼い主として表現のしようがない気持ちだと思います。それと、出荷適期を過ぎた肉豚についての損害も以外に大きいと思います。余分な餌代がかかるので。その補償についても、満額支給できるようにお願いします。気持ち的には、我々以上に追い込まれている状態です。保証額についても、算定基準価格があると聞きましたが、生まれた子豚の算定額が安すぎると思います。肉豚の損害と合わせてこれも農家の納得のいく額の保証をお願いします。そして、経営再開する為には、今の農場豚コレラと野生イノシシのコレラの両方が解決しないと安

心して再開に踏み出せません。ウチも長男が将来は家業を継ぐつもりで、大学の農学部に今年の春から進学しますが、彼が安心して、そして、胸を張って

日本の食糧自給を支えているんだ！と言えるような環境で事業継承が出来ればと思います。再スタートはゼロからのスタートではなく、マイナスからのスタート…。そのマイナスの事業資金もスムーズに進むことができるように配慮されることを望みます。

ウチも今日の夜には、殺処分が始まる予定です。現場は、農家以上に作業に追われる獣医師達が疲労困ぱいしています。自分も仲間の殺処分の手伝いで、一昨日は午前3時でリタイア、昨日は朝5時まで…事務所で2時間仮眠をとって、自分の農場を見回り9時から作業の手伝い…。自分だけじゃなく、係わる誰もが肉体的にも精神的にも疲れ果ててます。誰が悪いわけでもない…ただ、しょうがない…と、思うしかない…。過去は変えられないので、未来を変える為に今を全力で最善を尽くす！そんな事しか出来ませんが、明るい未来にする為にも、サポートの方を是非宜しくお願いします。また、僕も殺処分は初めてだったんですが、電殺は皮膚と体毛の焼ける匂いが鼻付き、いつまでも残っている気がします。炭酸ガス殺は、ケージかトラックの荷台ごとブルーシートで覆いガスを注入するんですが、暫くすると一斉に悲鳴とともに、もがき苦しみだし、息絶えるまで10分くらい苦しみます。本当に涙が出ます。こんな思いを、これ以上他の仲間たちにさせない為にも、是非今の現状を知っていただきたいと思っています。

Topics

シリーズ地域防疫 今こそ、我こそ！

第2回 PEDパンデミックから

旭市養豚推進協議会地域防疫部会成立まで

イデアス・スワインクリニック
 早川 結子

はじめに

千葉県における地域防疫についてのシリーズ第二回目です。この回では、AD清浄化成功のあとPRRSの清浄化に取り組もうとした矢先にPEDが大流行したこと、その惨禍からより踏み込んだ地域防疫の実現を目指して地元（旧干潟地区）養豚組合内に地域防疫部会が成立し、更に旭市内の全養豚組合が統合し旭市養豚推進協議会が成立するまでをお話したいと思います。

ADの次はPRRS！……のはずが

前回述べさせて頂きましたAD撲滅の成功は、私達地域にとって大きな自信となりました。生産者と獣医師が一丸となって取り組んだ結果、養豚密集地帯では不可能と思われていたことが可能になったのです。AD撲滅の見通しが立った平成25年、地域防疫の矛先が次に向いたのは、PRRSでした。大竹聡先生率いるPRRS撲滅チームJAPAN（P-JET）が発足したのは平成23年のことです。その前後、平成20年から平成24年にかけて鹿児島、宮崎、熊本、愛知、新潟などで地域ぐるみのPRRS清浄化活動が次々に始まり、その大きなうねりが全国的に起こった時期でもありました。千葉もADの次はPRRS！を合言葉に、千葉県北部家畜診療所が主体となって勉強会が開かれたり、若手を中心にしたPRRSの清浄化を考える有志の集まりができ、PRRSについて話し合う場が開かれるようになりました。この集まりにはブライトピックの北條那智先生や私などの獣医師も参加していました。しかし、この時点ではまだ地域全体がPRRSと向かい合う事を決定したわけではありません

でした。当時のこの地域にとってPRRSはあまりにも「身近」な疾病であり、清浄化という言葉に現実味を感じられない人の方が圧倒的多数でした。ですから具体的な取り組みはこれから…という矢先の平成26年にPEDパンデミックが起きました。

2014年PEDパンデミックが突き付けたこと

PEDの大発生は、PEDショックとも言える衝撃を地域に与えたと思っています。それは、「伝播力の強い疾病が一度この地域に侵入したら、あっという間に広がる」というシンプルな事実の実体験でした。これだけの密集地帯です。当然といえば当然でしょう。しかし、実際に地域内で未発生の疾病が目に見えるような形で迫って来、且つ域内で発生した瞬間に水面にいくつも落とされたしずくから波紋が広がるように、一瞬でほとんどの農場が浸潤を受けるという体験は、まぎれもない「ショック」でした。旭市で当時のPEDが発生したのは平成26年4月です。発生件数を月ごとのグラフにすると、いきなり4月がピークで始まり、5月に継続したあとストンと落ち込み、8月で発生が途切れます（図1）。いかに発生が急激だったか、グラフからわかるかと思います。このときのショックは、地域の多くの人にとって背筋の凍るような想像を掻き立てました。「——もしこれが口蹄疫だったら」…即ち、地域は一瞬で壊滅。この現実が、これほどのリアリティを持ったのは、初めてのことであったのではないのでしょうか。このままではいけない。これを教訓に、いかに重大疾病の侵入を防ぐか、そして侵入後どうやって広がるのを

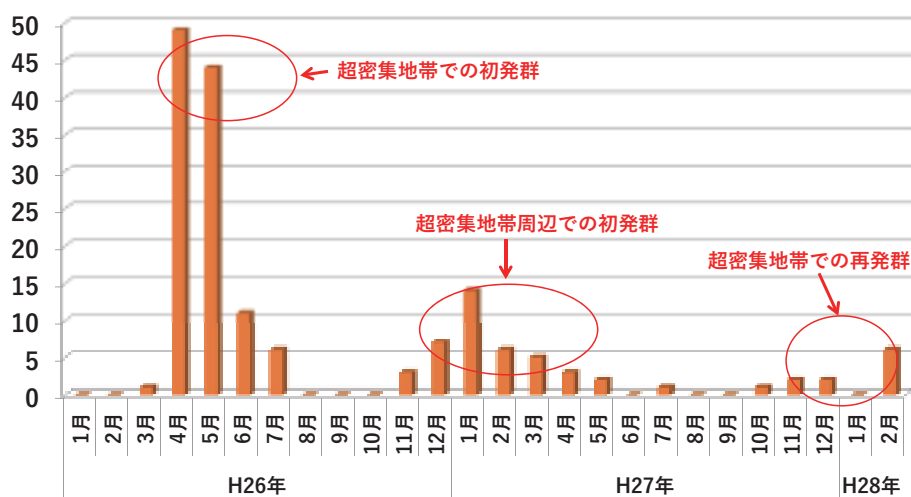


図1 千葉県PED発生届出数の推移 (H.26年～H.28年2月まで)

防ぐかを、真剣に考えなければならない。これまで取り組んできた地域防疫活動を、「侵入防止」と「伝播防止」に向けてより踏み込んだ実用的な形に変容させる必要が、地域に突き付けられたのです。

何が必要なのか

PEDがまだ千葉県に侵入していない頃、侵入防止を農場レベルだけではなく地域レベルでも実現する必要がありましたが、具体的に何をしたらよいのか全く分かりませんでした。このとき、日頃から重大疾病の侵入リスクを想定して、個々の農場そして地域としてのバイオセキュリティの要点を地域の皆で共有しておく必要性を痛切に感じました。さらにPEDが地域に侵入し、目に見えんばかりの勢いで地域の農場を飲み込んでいく中、自分を含めた当事者にとって最も切実な問題だったのは情報の錯綜でした。当時の混乱は、未知の疾病への恐怖と、メールやSNSで瞬時に広がる出所不明の疾病情報に因るところが非常に大きかったと思います。このときほど「農場の疾病情報は、農場主が自分の意思で、他農場に最短で届く方法で発信して初めて全体に有益である」ことを感じたことはありません。また、想像以上に所在地が不明な農場が多く、疾病発生情報を有効に活用できないこともありました。これらのことから、地域内の養豚場の位置情報を明らかにし共有するための農場マップと、地域内で疾病情報を共有するための発信・受信双方向の情報ネットワークの必要性が浮き彫りになりました。

地域防疫部会の成立と取組

PED発生が収まりを見せた平成26年6月、後れ馳せながら開かれた地元養豚組合総会で「まずは農場マップの作成を」の声が上がりました。さらに農場マップを含め疾病情報など個人情報の壁を越えたネットワークを構築する専門部会として地域防疫部会の立ち上げが提案され、岩岡喜久男組合長のもと全会一致で決定されました。当時の部会構成は生産者4名に加えて共済、開業、家畜保健所の獣医師から成り、私も当初から参加させて頂きました。その主な取り組み内容は以下の通りです。

- ①生産者マップの作成、取扱いルール策定
- ②緊急連絡網構築
- ③車両消毒マニュアル策定⇒のちに出荷防疫ネットワーク構築に変更
- ④運送業者・屠場関係者とのコミュニケーション強化

このうち特に①は地域の防疫戦略の土台であり、②は有事の際の初動に影響し疾病の拡大を防ぐためには欠かせません。いずれも究極の個人情報であり、組合員全員から住所、連絡先、疾病情報を地域の疾病対策のために共有する同意を1人ひとり全員から取り付け、最優先で実現しました。情報伝達にはSNSやメール、FAXなど様々な手段がありますが、ここでは昔ながらの電話の連絡網が選択されました。世代に関係なく可能であること、誰にいつ伝わったかが明確であることがその理由です。この連絡網はPED発生時に既に機能していますが、連絡時に必ず肉声での会話が付随するため、血の通った信頼のできる連絡方

法になっていると思います。③④については産業上も防疫上も最重要と言っても過言ではない出荷に関わる項目で、この地域の「弱点」を克服するために欠かせないポイントになっています（後述）。

病気が広がりやすい要因……①自然条件、交通条件

平成26年のPEDは、なぜあれほど素早く広がったのか。同じことを繰り返さないためには、ただ「農場が密集しているから」ということに留めず、具体的に疾病が広がりやすい理由を明らかにする必要があります。まずこの地域の自然条件つまり地理地形、気候について考えると、平地と台地とで構成され自然の障壁がないこと、海に面しており強風地域であることと風向きががらりと変わりやすく空気が攪拌されやすいこと、などが挙げられます。また、産業としての条件を考えると、鹿島港と農場密集地帯の間に飼料に関わる大物流があり、町の中央には大規模屠場が位置し地域内外から毎日2000頭近い生体が集約されていることから、多くの大型車両が飼料工場と屠場を介して農場と農場を行き来している構造が浮かび上がります（図2）。



病気が広がりやすい要因……②出荷に関する特徴

ここで、PEDが収まった後に養豚組合内で個々のPED症例を話し合った際に実施されたアンケートの一部を紹介したいと思います。このアンケートはPEDに関する貴重な疫学・症例情報を整理し記録しておくのが目的でしたが、この地域のある大きな特徴を明らかにした点でとても意義深いものになりました。それは、肥育豚の出荷を運送会社に外部委託する農場が圧倒的

多数を占めており、かつその9割以上の業務をたった2社の業者が請け負っていたという事実でした（図3、4）さらに、各農場の出荷先ナンバーワンは8割以上が市内中心に位置する大型屠場（株）千葉県食肉公社でした（図5）。これらのことから、実は限定的な車両群が屠場をハブに農場と農場を日々行き来している実態が初めて自覚されたのです。もちろん各社の出荷車両は積み下ろしの際洗浄消毒を行っており、食肉公社でもさまざまな消毒設備を備えてはいますが、自家出荷と比べた場合、農場間の交差汚染のリスクはどうしても高くなります。手間のかかる出荷業務を専門業者に委託し、出荷先は市の中心にある大規模な屠場に

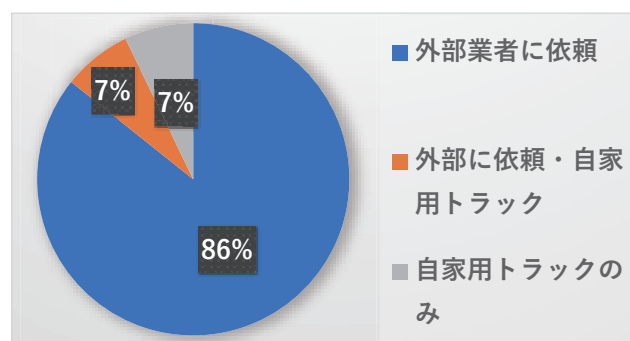


図3 Q：出荷形態は？
（旧干潟地区養豚組合のPED疫学アンケート結果より）

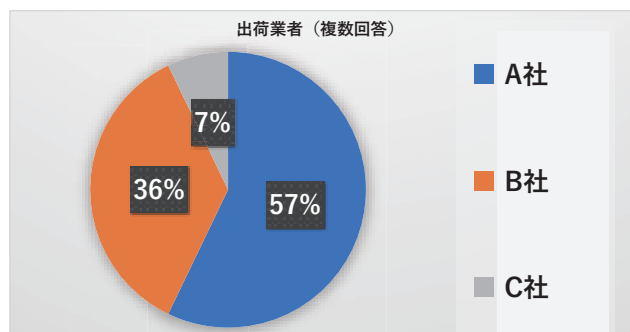


図4 Q：出荷業者は？
（旧干潟地区養豚組合のPED疫学アンケート結果より）

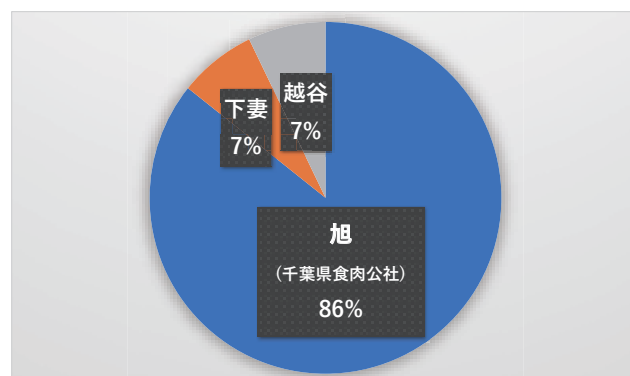


図5 Q：第一出荷先は？
（旧干潟地区養豚組合のPED疫学アンケート結果より）

集中させる。これらは、養豚を営む上では非常に合理的といえましょう。しかし、疾病の伝播を考えた時、私達地域が抱える大きな「弱点」でもあります。この出荷に関する脆弱性を克服するために、上記の③④（出荷防疫ネットワーク）が地域防疫に欠かせないこととして挙げられたのです。

出荷防疫ネットワークとは

少し説明を加えますと、出荷防疫ネットワークは、出荷に関わるバイオセキュリティ上の区分を農場、運送会社、屠場とで設け、それぞれが実施すべきことを明らかにした上で意識的に防疫を連携するというものです。このうち「出荷防疫農場編」がまず完成し、10項目からなる出荷（主に農場での出荷豚積み込み作業）に関わるバイオセキュリティ上のポイントがわかり易く整理されました。一見アンケートのように見えますが、特徴はその実施方法にあります。地域の生産者が集まって、スクリーン上で各項目の様々なパターンのリスクの違いを視覚的に理解しながら進めて行きます。自農場はどれに当てはまるのか、改善するならどうすればよいのかがわかりやすくなっています。

平成26年から5年経った現在、PEDが当地域で再び猛威を奮っていますが、5年前と大きく異なるのはPED発生農場の情報が連絡網で伝わってくることで、正確迅速な情報伝達とバイオセキュリティ向上の成果か、面での広がりや始まりは始めだけで止まり、密集エリアのおおよそ半分が未発生のまま流行の終息が見えてきていることは、大きな前進だと思っています。

養豚組合の「市町村合併」から旭市の地域防疫部会へ

このように地元養豚組合でできた地域防疫部会が各課題に取り組みながら、並行してもう一つ大きな挑戦が進んでいました。それは、旭市内に存在する複数の養豚組合（ここまで述べてきました、私が所属していた「地元養豚組合」は、旭市の中の旧干潟地区と呼ばれる市内有数の養豚密集地帯の組合です）を「旭市」の名の元に統合し、歴史ある各組合の壁を越えて旭市として一つになろうというものでした。行政区分上の市町村合併は平成17年に成立して今の旭市ができたものの、各地の養豚組合は旧区分を保ったままで、組合統合の試みは何年も前から関係者の間で囁かれては実現を見ずに

来ていました。が、PEDパンデミックとそれに続く旧干潟地区の生産者の結束強化を受け、「より効果的な地域防疫のため」に組合同士の統合合併が実現したのが平成29年4月、今から2年前のことです（図6）。この年の春、各養豚組合では解散総会が開かれました。私も旧干潟地区養豚組合の解散総会に列席しましたが、当組合が力を入れてきた地域防疫の一層の発展のために、様々な事情を乗り越え、それぞれの組合の歴史と特色を脇へ置き、旭が本当の意味で一つになろうとする明るい未来を見据えたこれ以上ない良い解散総会でした。他の組合の解散総会に列席されたある関係者の方も、同じように感動したと話されていたのを覚えています。



図6 養豚組合の統合

PRRSの地域ぐるみの対策へ

こうして現在の旭市養豚推進協議会が成立し、旧干潟地区養豚組合地域防疫部会は、旭市養豚推進協議会地域防疫部会へと名称を変え、メンバーも増員されて新たなスタートを切りました。そしてその旗頭には、初めて「地域ぐるみのPRRS対策」がはっきりと銘打たれました。実はこれまでの間、地域防疫部会の具体的な取組課題はほとんどが地域防疫の土台作りに関することであり、具体的な疾病をターゲットに挙げてはいませんでした。が、平成28年から29年にかけて市内で大規模なPRRSの地域的流行が起こったことを期にこれ以上PRRSの問題から目をそらさず、地域ぐるみで対策していく方針が初めての総会にて推進協議会初代会長松ヶ谷裕氏の口から明言されました。ちなみに、松ヶ谷氏は、PRRSの若手有志グループに社長世代で唯一参加して下さった方であり、旧干潟地区で地域防疫部会ができて以来ずっとそのリーダーを務められてきた方です。そんな旭市の養豚家たちの新たな門出を援護してくれるようなタイミングで同年から地域豚疾病緊急対策推進事業が始まり、旭市PRRSコントロールプロジェクト始動に至ったのでした。次回からこのプロジェクトについてお話させて頂こうと思っております。

Dr. 伊東の
ランダム
シンキング

第11回 「天皇退位」に際して思うこと

伊東 正吾

1. 日本における天皇制と今上天皇

わが国の歴史では神武天皇の即位以来、天皇が君主として存在する統治体制が維持され、特に明治憲法の下では法的に確立されていました。しかし、第二次世界大戦（太平洋戦争）の敗戦を機に、新たに日本国憲法が制定された中で『象徴天皇制』となり、「天皇は日本国の象徴および国民統合の象徴であり、国家的儀礼としての国事行為のみを行い、国政に関する権能を有しない」ことが明記されました。

平和憲法としての評価が高い現在の日本国憲法の下で、初めて天皇（第125代）に即位されたのが現在の今上天皇（明仁陛下）であることは広く認識されています。今上天皇の父上である昭和天皇は、先の大戦時では大元帥の立場であったことから戦争責任を追及され、敗戦後には一転して象徴天皇として在位されたように、激動の中で苦悩されたと思います。一方、今上天皇は皇太子時代から必然的に象徴天皇としての在り方を暗中模索される宿命を背負うことになり、計り知れないご苦労があったことは想像に難くありません。

天皇や皇室の活動の基本は長き歴史の上に成り立つ皇室典範に記載（規制）されており、良くも悪くも、新時代に即応した皇室や天皇像を追究するための新たな一歩を踏み出すのは容易ではなかったと思います。しかし今上天皇は皇太子時代から熟慮され、改革のための果敢な挑戦に挑まれました。その一歩には、民間人であった美智子様をお妃に迎えられという、劇的なことがありました。この出来事は、全国民が皇室をより身近に感じるきっかけとなり、新時代の開かれた皇室像を形成する大きな変換点になったことは明白です。

2. 国民と共に歩まれた今上天皇

昨年12月、退位を目前にされた85歳の誕生日に、今上天皇は全身全霊で追い求められた象徴天皇としての30年を回顧され、その熱い胸の内を淡々と、しかし力強く語られ、私たち国民は一樣に強く胸を打たれながら拝聴しました。

皇太子時代には、戦火を交えたオランダ訪問や英国訪問では不測の事態が勃発する可能性が強く懸念される中で、その飾らないお人柄と戦没者に対する真摯な慰霊の態度により、訪問終了時には、訪問国の国民感情は一転して親愛の情を抱くまでに変化したと報道されています。また国内においても、天皇に代わり皇太子時代に美智子妃と沖縄を初めて訪問された際、ひめゆりの塔の献花台で過激派に火炎瓶を投げつけられる事件も発生しましたが、「この地に心を寄せ続けていく」と宣言され、延べ11回も訪問されて沖縄の人々の心に寄り添われ、ご夫婦で琉球に関する歌を詠み作曲までされていたことは特筆に値します。

平成元年の即位の際に、「皆さんとともに日本国憲法を守り…」と従来になかった言葉遣いをされて、マスコミや多くの国民が驚いたことに始まり、昭和の負の遺産である戦争に対しては「戦地巡礼の旅」を天皇后お揃いで続けられたことには頭が下がります。

平成時代は戦争のない時代でしたが、その一方で自然災害が多発した時代でもありました。今上天皇と美智子皇后は災害発生後の地域住民に深く心を寄せられ、いち早く被災地を慰問され、避難所では被災者の手を取り、膝詰めで激励され、予定時間を超えても被災者を激励されるお姿は、まさしく国民の苦しみに寄り添う象徴天皇のお姿でした。

3. 今上天皇と美智子皇后の教示

今上天皇は、人としての在り方、そして心を寄せるとはどういうことかという点について、自らを手本としてお示しいただいたと強く実感します。このことを思うと、行政を担当する政治家、庶民の代表である政治家こそ基本的に率先して動くべき立場であるはずですが、「国民・県民に心を寄せて…」とか「真摯に受け止めて…」などと美辞麗句だけを口先で言うだけで、真の行動が伴っていない政治家が多いことは、極めて残念でなりません。

今上天皇は第二次世界大戦の終戦を疎開先の奥日光で迎えられたようですが、報道資料によると、疎開時にはそれまでの皇室の教育環境の影響もあり、若干わがままな部分もおありだったようです。ただ、それは当時の帝王学が大きく影響していたと思われ、大元帥の立場で戦争責任も問われた父・昭和天皇の苦悩を間近で見て思い、新しい時代での在り様をご自身の感性で熟考され、留学などの各種見聞に啓発されて自分の考え方を確立されたことで、国民から尊敬と称賛の思いで迎えられる現在の状況に至ったと思います。

この状態に至るまでには多くの困難があったことは想像に難くありませんが、美智子様との深く強い信頼関係があって初めて成し得られたものと拝察できます。また、天皇即位時のお言葉として、「象徴としての存在を強く意識し、皇位以外の人生や皇位に

あつては享受できない自由は望んでいません」と語られていましたが、このように並々ならぬご覚悟で臨まれたことに圧倒されましたし、その悲壮ともいえるご決意こそが30年間における素晴らしい足跡を残された要因であると言えます。

4. 全身全霊と孤高の存在

奇しくも同時期に、日本プロ野球界はもとよりメジャーリーガーとして記録と記憶に残る偉業を達成し、そのストイックさと言動から世界的に高く評価されているイチロー選手が引退することになりました。僭越ですが、私には、分野と次元は異なりますが、今上天皇の日頃の姿勢と退位が、イチローの歩みと引退に重なって見えてなりません。

穏やかな外貌である一方、その内に秘めた信念と、自身に厳しく他者に優しい姿勢、更には目的に対して全身全霊を賭して真摯に日々継続して対峙する姿勢には共通するものがあり、まさに「気高き孤高の存在」と言えるのではないのでしょうか。

日本国民はもとより、世界中から敬愛される唯一無二の存在として私たちは誇らしく思い、また、限らない勇氣と幸福感を受け取ることができたと思います。

退位後は、美智子皇后との有意義な時間を持たれ、また、皇位にあったために望まれなかった自由な時間を享受されることを、心からお祈り致します。



伝統の皇居の外観は変化ないが、中ではこの30（60）年で大きな変革が認められた

事務局からの
お知らせ

新入職員のご案内

初めまして、この度、日本養豚事業協同組合にて勤務させて頂くことになりました池田護と申します。今後ともよろしくお願い致します。

実は私、飼料メーカーに30数年勤務しておりましたので、初めましてではない組合員様も多いと存じます。微力ではございますが、私の経験が皆様のお役に立てるよう精一杯励みますので、今後とも末永くよろしくお願い致します。



4月1日から着任致しました小野寺由希子です。

受発注をメインにさせて頂きます。

趣味はフラワーアレンジメントとダンス、そして食べ歩きです。

今後、お電話等で皆様にお世話になるかと思います。

どうぞよろしくお願い致します。



豚事協の年間行事

理 事 会

第 1 回	平成31年 1月24日 (木) (東京)
第 2 回	平成31年 2月22日 (金) (東京)
第 3 回	平成31年 4月19日 (金) (東京)
第 4 回	令和元年 7月19日 (金) (東京)
第 5 回	令和元年10月18日 (金) (東京)

支 部 会

中 部 支 部	令和元年 6月14日 (金) (名古屋)
関 東 支 部	令和元年 7月 5日 (金) (東京)
北 海 道 支 部	令和元年 7月26日 (金) (札幌)
東 北 支 部	令和元年 8月30日 (金) (仙台)
中 四 国 支 部	令和元年 9月13日 (金) (松山)
九 州 支 部	令和元年10月11日 (金) (熊本)
沖 縄 支 部	令和元年11月15日 (金) (那覇)

女 性 部

第12回女性部セミナー 令和元年 6月24日 (月) ~25日 (火)

そ の 他

海外視察研修 令和元年 9月 7日 (土) ~15日 (日) (オランダ・フランス)

※青字は令和元年 5月 1日以降の行事となります。都合によっては変更・中止となる可能性もありますこと、ご了承下さい。

編 集 後 記

皆様のご協力のおかげで、無事第18回通常総会を開催することが出来ました。改めて感謝申し上げます。お忙しい中、総会に足を運んでいただいた方々本当にありがとうございました。

開催直前に組合員でもある愛知県田原市の養豚団地に豚コレラが侵入し、殺処分が決定しました。一気に被害が拡大し、そのような状況で総会を開催して良いのだろうかとの戸惑いもありましたが、生産者が集結し窮状を訴えると同時に、イノシシや豚コレラについて勉強し、今後の対策を練ることも重要だとの思いで、当初の予定通り開催に至りました。

4月3日現在、豚コレラの被害に遭った組合員は13名。私自身訪問したこともある農場も被害に遭い、農場の様子を想像すると胸が詰まり、被害に遭われた方々の気持ちを思うとかけ言葉が見つかりません。

今回野生イノシシから検出された豚コレラウイルスは海外から新たに侵入したものであることが判明し、またアフリカ豚コレラの生きたウイルスが国内で確認されました。生産者は様々な病気の侵入を防ぐために日々努力していますが、海外からの新たな侵入は行政が水際で防いでくれないとどうしようもありません。1日も早く豚コレラ・アフリカ豚コレラの恐怖から解放される日が来ることを願ってやみません。(東)